

(1) 単元名： 物語を読む 「お手がみ」

(2) 本時の目標： 4の場面を読む

☆本資料に出てくる子どもの名前は全て仮名である。



24年度も残りあと1月となる3月である。奥間小学校1年のM先生に24年度最後の授業公開の依頼をした。ゆい研究員の安波小のN先生と同じ単元の同じ場面を扱ってくれることを前回の「授業を語る会」で了承してもらった。写真①、職員室の入り口に、卒業式までのカウンタダウン表示が卒業生すべての写真入りで飾られている。「一人ひとりの個を大切に」とよくスローガンやテーマで見たり聞いたりするが、言葉は言うだけ、スローガンは掲げるだけの事実もよく見てきた。奥間小の子どもたちの笑顔の写真は「私たちは幸せです。大切にもらっています。」語らない言葉が聞こえてきそう。だれが見てもうれしい好意だ。写真②、真紀先生の教室の後ろ壁です。整然とした壁と棚はきれいを越えた「美しい」の言葉が出てくる。1年生です。素晴らしい！



奥間小の校内研修の授業公開とは全く別の企画だったのですが、校長先生、教頭先生をはじめ多くの先生方が授業を参観に来てくれました。近隣の辺土名小学校からも教頭先生と2人の先生方の参加がありました。

【授業始め】 0:00



「学び合う授業」は、教室の仲間の多様な考えと交流し、その中で今もち得ない自己の未知への挑戦である。すべての子ども達の気づき疑問つまずき、を尊重し教師が受け止め合うことで安心して学べる教室になる。子ども達が互いの考えを出し合って「聴き合う」授業こそが「学び合う学び」を成立させてくれる(石井順治)。まとまりのない話でも、親身に

温かい表情で受け止めてもらえた心地よさを体験しているこの子ども達、大好きな先生が話型にこだわるよりも、丸ごと僕の言葉を受け入れてうれしそうに聴いてくれるならば、「もっと話したい」、「もっと聴きたい」となるのが自然である。形式やパターンを身につけることも大切でしょう。しかし、それ以上に子どもの「話したくなる」「聴きたくなる」姿勢を作り出すことがまずは優先されるべきではないでしょうか(児玉健二)。本日の奥間小学校1年生の輝く眼(瞳)を創り出したのは明らかに教師である。6月ごろまでは教師は学級経営に大変苦勞していた。つらい、苦しい、顔をして授業を営んでいた。二学期の半ば頃から落ち着いて本日のような「学び合い」の授業が成立できるようになってきたと言う。素晴らし教師と子ども達の関係です。

【寄り添う】



授業開始前、養護教諭が一人の女の子を連れてきた。担任教師が温かく受け入れている、教師の隣にさらに友達を気にかける仲間がいる。「寄り添う」は授業だけでなく日常的に心がけることである。担任につながることで子ども達がおぼえる安心は計り知れない。

【3の場面の振り返り】 1:00



前時の3の場面の読みと振り返り、各々読みから指名読みに進む。各々自分のペースで読み進める。

読みは大切である。教師は音読となると、「元気な声」「すらすら読める」「発音」「みんなと揃う」「語尾までしっかり」と求めがちであるが、物語の読みで大切にしたいのは何？ 自分なりに読み取る、あるいは読み入る、自分が一番わかりやすい読み方でいい。このクラスはそれが許されているから、安心して読み入ることができる。たどたどしい読みの仲間にも、決して重苦しい空気を与えない(教師の心がまえ1つである)。

物語をどう受けとけるかは、子ども一人ひとりに任せられるべき行為である(秋田喜代美)。この1年、教師の予想を超えた子ども達の「読み」の力は何度も見てきた。僕なりの対話の準備として大切にしたい。

【共有する】7:00～



教師のテンションも低く、声も小さい、とにかく教師の「聴く」が徹底して子ども向けられている。45分の間、教師と子どもの声子どもと子どもの声が重なり合うことがない。だから小さな声の子どもも一人残らず「学び合い」に参加できている。すばらしい「聴き合う」学級ができています。たどたどしい発言もあるが、どんな発言もすべて受け入れている。教師の姿勢を見て子ども達も自然と仲間の発言を「そうか～」やわらかい声で受け入れている。安心して何でも話せる学級である。「話せる」は「聴いてくれる」という保証がない時はほとんど成立しない。さらに「聴いてくれる」の裏付けには、「僕も友達の話はしっかり聞くから」の関係でできている。

11:10 教師：ここまでのがまくん、かえるくんのお話聞かせてくれる。(4の場面 読みの後) 一斉に手が上がる。

「でもきやしないよ」あきらめているがまくんをどうにか勇気づけよう、あきらめさせないようにしたいかえるくんの心にせまる。みんな思いを語る。

子どもは素晴らしい！自分の思いを言い合うのではなく、まさに「聴き合っている。」「ちょっと似てるけど」「ちょっとちがうけど」、この「ちょっと違う」けどが個の主張でもある。似ているけど違うそれを分かってほしい子の願いである。(ほんとは同じでありたくない子ども心を見つめよう。)

17:00 「でもきやしないよ」から「だって ぼくが きみに お手

がみ 出したんだもの。」の会話文に教師が導く。話したい子どもが殺到！それでも聴き合いは決して乱れない。

夢乃：がまくんがかわいそうだから教えなくなった。
陸：がまくんちょっとうれしかった。

正樹：ちょっとじゃないよ、1回ももらったことないから百倍くらいうれしんだよ。だって始めてもらうんだもん。



写真③、仲間の発言に聞き入る仲間たち、「分かってほしい」として聴いている」姿勢がすばらしい！

写真④⑤、教師はこの後、3回ペアでの話し合いの設定をした。

- 1、「でも きやしないよ」「きつと くるよ」をペアで音読後、話し合う。
- 2、「でも きやしないよ」はがまくんはあきらめたのかな？
- 3、がまくんは いつ 窓のかえるくんの よこにきたんだろう？

35:40

「学び合い」がMAXになる。

正樹：寝ながら話を聞くと失礼だから、姿勢も悪いし。
道一郎：手紙出したのが分かったから、早くもらいたくて「なぜかなんて書いたか聞いてしまった」
正樹：聞いてしまったんじゃないかと、もともと聞きたかった。

仲間の考えを聞きながら、自分の考えに取り込み独自の考えへと昇華させる。まさに学び合う教室を目指す、子ども達の自己の変容や高まりが期待できる対話だ。仲間の発言を認めながら「聴き合う」ことで読みは深まり広がる。教師は実によく聴き「つないだ」、「何か言いたそう」の見取りも見られた。この子たちの聴き合う姿は、まぎれもなく教師の聴く姿勢の模倣である。たどたどしい発言、つながらない発言、飛んでしまう発言、それでも教師の言葉は、子どもの発言に対する短い共感の言葉がほとんどであった。

授業終了まで、聴き合う・訊き合う・支え合うは教室でこだまするように続いた。途中、右京さんが集中が途切れる場面が見られたが、まゝ～何とかもってくれた。(途中の一声がほしかった。)

授業は、最後に少し消化不良を残した形になったが、全然平気です。子どもは全く気にしていなかった。

M先生、ありがとうございました。3月6日年度末、心より感謝します。

素晴らしい子ども達ですね。1年生でも「聴き合う」が成立するとここまでやれるんですね。正直言ってびっくりでした。先生の子ども一人ひとりを大切に
する学級経営がありありと見えました。先生が聴いてくれるから「何でも話せる」
先生が聴いてくれるから僕たちも聴く。しっとり素敵な授業とは…見せてもらいま
した。右の写真、先生がペアでの話し合いにおろしたとき、どのペアも、全く自然
に溶け合っていました。美しい、安心できる風景ですね。国頭で「学び」が始まっ
てまだ 1 年、各学校の先生方のほんとに献身的な授業公開で、私自身がたくさんのことを学ばせてもらいま
した。ほんとにありがとうございます。平成24年度の締めくくりの授業にM7先生を設定して大正解でした。



終わりに、「言葉には いつも 心がかかっている。」石井順治先生の言葉です。 国頭学びの会ゆい